



失われた黄金都市 Congo (1980) マイク
ル・クライトン (平井
イサク訳) 早川書房
(11/30刊・¥1500)

コンゴの奥深く、光コンピュータの素材に
欠かせないダイヤモンドが眠っている。しか
し、探査に送り出された資源開発技術社の探
険隊は不可解な事故で全滅した。技術社は再
び調査隊の派遣を決める。時間は残されてい
ない。日欧合弁企業の部隊が、同じ目的のた
めにむかっているのだ――。

本書は、非常にオーソドックスなスタイル
で書かれたアフリカ探険物といえる。舞台は
コンゴ、失われた古代文明とダイヤモンド、謎の類
人猿に人喰人種とくれば、そのままターザン
かアラン・クォーターメンかを連想する。た
だ敵役が日本企業(産業スパイも出てきます)
で、隊員にコンピュータ屋の女性と手話ので
きるゴリラがいて、しかも始まって終るまで
が二週間と、いかにも現代風の味付けがなさ
れている。コンピュータが駆使される点も、
『アンドロメダ……』以来のオハコ。一気に
読める痛快さも例のごとく設定が通俗的
な分、もう少し登場人物に厚みがあってもよ
かったように思うが、クライトンにそれを期
待するのはスジ違いというものだろう。もっ
とも、コンピュータの使い方には、今回やや
違和感が残った。